

十段物語



第10回

左右自在、稀有の名人 中野正三

本橋 端奈子

新潟の腕白少年



中野正三十段

中野正三は、明治21（1888）年1月6日に中野真太郎の三男として、雪深い新潟県中蒲原郡新津町字草草¹に生まれた。実家は付近36ヶ村を束ねる大庄屋で、祖父は日本画家として谷文晁の弟子となるなど、経済的・文化的にも恵まれた家庭であった。²中野は子供の時分からかなりの腕白者で、高等小学校2年の頃、喧嘩をして友人の頭を棒で叩き3針縫う怪我を負わせてしまい、5日間

の停学処分を食らったこともあったという。小学生にして停学というのは新津町尋常高等小学校始まって以来の珍事で、学校も村も大騒ぎになる程であった。

中野のその腕白な性分は武道への興味に向けられた。彼は、父から剣道を、二人の兄からは柔道の手ほどきを受ける。特に兄から教わった柔道が面白く、中野は勉学そっちのけで熱中して練習に励んだのであった。

上の兄二人は医者になるため医学校に通うほど優秀で、中野も医者になるよう家族から勧められていた。しかし兄たちと違い中野は、勉学はどうやら落ちこぼれの部類で、医者になることもあまり気乗りしなかったようである。結局、中野は中学校の入学試験に落ちてしまい、15歳で高等小学校を卒業してから2年ほどを無為に過ごすこととなる。しかし

やはり明治の少年である、自分の力で何かを成したいという気持ちで中野も抱えていた。その為には東京に行きたい、という思いが次第に強くなっていった。そして明治38（1905）年、遂に思い立って、兄たちの上京に合わせて東京へ上ることとなるのである。

念願の東京へ出て来た中野であったが、何を成せばいいのか考えても答えが出ない。そこで彼の脳裏をよぎったものは、郷里で兄たちに教わっていた柔道であった。柔道を本格的にやってみよう、そう心に決め、兄たちに内緒で本を質に入れて入門料を捻出し、講道館への入門を果すのであった。³明治38年3月19日、17歳のことである。入門料は1円、毎月の道場費は30銭の時代であった。

左右の技を特訓

当時、日本は日露戦争の只中に

あって、講道館もその雰囲気の中で何か殺気立ったものがあったとい⁴う。道場は夜も昼も無く常にいっばいで、寒稽古などは皆負って夜中の2時半からぶっとおしで行う様な、そんな時分に中野は入門した。尋常ならざる、騒然とした道場の空気に気圧されながらも、中野は壮気を奮い立たせ、修行に没頭して行くのであった。この頃毎日道場に来ていたのは横山作次郎⁵、半田義麿、伊藤徳五郎らであったという。

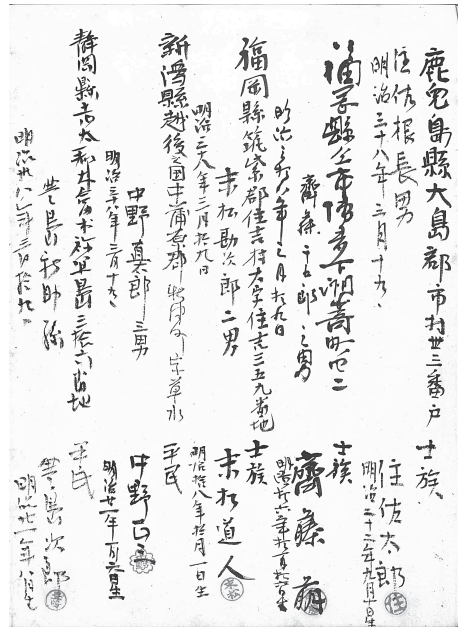
柔道の稽古に当たっては、兄から「右技ばかりやっていると、右も左も出来なくなるとは満足な柔道ではないぞ」と常々諭されていた。その言葉に従い、彼は左右どちらでもとれるように稽古を積み⁶、更には日常生活においてもペンや箸を左手で持つなど、左右両利きとなるよう努めた。「片方だけの技では、進歩もつき足で歩くよ

うに遅々としてしまう」という信念の下、左右平等に技を習得していった。

また、勉強にも再度取り組もうと決心し、三船久蔵⁷らと私立東京正則英語学校⁸で学び、更には日本大学植民科の夜間に通い、昼は柔道夜は勉学といった生活に明け暮れるのであった。

とにかく中野の練習量は飛びぬけて多かった。当時、普通の者が3時間で10本弱やるところを、中野は1日20本、多い時で30本こなしていたという。これは、中野が師と仰ぐ横山作次郎の教えであった。中野は、横山の指導振りを次のように述懐している。

思い出の稽古振りは何と言っても第一人者は横山先生と申す外は有りません。先生の稽古は畳数二三枚の範囲内で殆ど立ち通しの形で稽古を付けて居られました。



中野が署名をした入門誓文帳

現時の修行者に見受けられる様な道場を広く歩き廻らず、寸分の隙なき稽古振りには終始武道としての御心懸けより出た事でありましよう。¹⁰

横山と中野の師弟関係はとても密であったようである。その契機には以下のような逸話がある。当時、講道館は下富坂¹¹に道場を持っていたが、夏季などは道場裏の井戸で水浴

いう。¹³ ある日、あまりに井戸が汚いので、中野は門人の江川貞夫を誘って井戸さらいを試みた。数時間かかってやっと綺麗になり、井戸のそばで二人が一息ついていると、その様子を横山が見ており、感心な奴らだということと横山の家で、“麦茶”をごちそうになったのであった。ここでいう“麦茶”とはビールのこと、横山は日本酒を“茶”、ビール

びをするのが修行者たちの慣例となっていた。ただ、あまりに人数が多く、入りきらない場合は近所にあった神道無念流剣術の有信館¹²の井戸まで遠征し、有信館の者らを閉口させていたと

を“麦茶”と呼んでいたようである。¹⁴ これをきっかけに横山は特に中野に目をかけてくれるようになったという。まさに名人と謳われるような横山の指導を熱心に受けた中野は、明治40（1907）年3月23日には初段、翌41年1月12日の鏡開式には20歳にして二段、とかなりのスピードで昇段を果していくのであった。

警視庁武術大会での名勝負

破竹の勢いで実力をつける中野であったが、彼の名勝負を挙げれば明治42（1909）年の春季紅白勝負と、同年の警視庁武術大会での兎玉光太郎との一戦であろう。¹⁵ この年5月23日の春季紅白勝負に紅組四将として出場した中野は、5人を倒し白組副将の三段・中野栄三郎と引き分けるといふ快挙を演じた。¹⁶ うち二人を得意の内股で仕留めたという。こ

の活躍が嘉納師範に特に評価され、5月26日に三段への昇段を許されたのであった。

そして同年10月、弥生神社¹⁷で行われた警視庁武術大会において、児玉光太郎二段と手合わせることになる。児玉は、天神真楊流柔術・谷鯨雄^おの下で修行を積み、後に講道館へも入門した寝技に長けた猛者であり、当時は築地警察署に勤務していた¹⁸。立技では左右の釣込腰を得意としていたという。この二人の勝負は以下の文章に詳しい。

中野の自然本体に近い姿勢は、まことに春風駘蕩として爽やかである。これに対して児玉は右の自護体に組む。両者の攻防は、あくまで理詰めで無理な力を用いない、水の流れるような流暢な体さばきである。だがそれはあくまで表の姿形であって、心中は激しく火花を散らして闘っていた。果然、

中野の柔らかい、全身これバネという体から得意の左跳腰が閃き、児玉の体は宙に跳ね上げられて舞い落ちた。さすがは児玉、畳に落ちたときは体をひねって横に落ちた。審判は首を傾けたが「一本」を宣言せず。中野はすかさず寝技の滅法に強い児玉を抑えにかかった。観ている者は一斉に驚いた。これは無茶である。寝技は一通りやっても得意でない中野が、敢えて火中の栗を拾おうというのだ。案の定、児玉はニタリと笑みを浮かべて「よっしゃ来た」とばかりに、上なる中野を返さんとするが、中野もさるもの、そう簡単には児玉の注文には乗らず、約2分で立つ。組み直すや否や、今度は中野の右内股が一閃した。さすがの児玉もこの冴えた内股をくらはって防ぎようがない。その体は宙に舞ってダーンと畳を背負った。鮮やかな

人間の記録

嘉納治五郎

——私の生涯と柔道——

三二六頁 ページ

一、八九〇円（税込・送料別）

嘉納治五郎著 日本図書センター刊

嘉納治五郎の人物・面目、柔道とは何か、講道館柔道の発展の経緯、嘉納治五郎の偉大な教育家としての抱負とその実力等、嘉納治五郎の研究及び日本の近代化の推移等の研究には見逃せない資料です。



◎お申込・お問合わせ先

東京都文京区春日一六一三〇

講道館総務部

電話 〇三三三八一一七二五五

〒112-0023

文句のない一本である。¹⁹

余りにも見事な鋭い内股に、満場の観衆は利那静まり返ったという。そして一瞬の後、会場は怒涛のような拍手に包まれたのであった。²⁰ 中野はこの大会での功績が認められ、21歳にして警視庁へ入庁し、柔道教師を拝命することとなる。また、翌43（1910）年には日本大学の柔道師範を、大正5年（1916）年には慶応義塾の柔道師範も兼ねることとなり、若くして柔道指導者としての道を歩んでいくのであった。

八方開きの稽古

柔道の指導に熱を入れるとともに、明治45（1912）年には四段、大正7（1918）年には31歳にして五段、大正15（1926）年には39歳の若さにして六段と、順調に昇段も重ねていった。

中野が左右とも様々な技を使える

様に自らを鍛え上げていたことは前述した通りだが、その中でも、彼は特に跳腰や内股を得意としていた。中野の技について、明治末年ごろの講道館下富坂道場の描写にこの様なかだりがある。

一度跳腰を行うやその勢い当たるべからざるもので一同鳴りを静めて拝見する。払釣込足、大内刈、背負投など得意で、跳腰は最も得意とするところで、たいていの者はこれで飛ばされる。如何なる大敵に対しても、また小敵に対しても、終始自然本体を保ち少しも頑張るとかいうことはない。これが同氏（中野）の多くの業を連発し得る理由でまた最も美しいところである。²¹

片手で跳腰を決められるほど、この技に長けていたという。²² また、中野の柔道が「美しい」と表現されているように、どんな相手でも組み手

を争うことなく相手に自由に取らせ、その上から柔に握り自然体に構えて、「八方開き」の状態で稽古をつけていた。²³ 横綱が懐をあげて稽古を下の者につける様に、良い技ならどどん投げられてやって下の者を育てたのであった。「自分が投げればかりいて強く上手くなることは出来ない、沢山投げられて初めて技が出来、身体も出来る。また上位の者は下位の者に投げられてやらなければ技を教えることもできない」と口癖のように言っていたという。中野の当時の稽古振りを、慶応義塾卒業生の羽鳥輝久は以下のように振り返っている。

「人間右か左かしかできないのは片端だぞ」と注意され、右の受身をとって下さると直ぐ左がかかけ易い姿勢をとって左の受身もして下さいました。ホイ背負をかける、ホイ大外刈、ホイ足払だといった

工合に促されて、立っている間がない程よたた技をかけさせられたのを覚えております。四十才半ばであんなに受身をして下さった指導者は私の五十年近い経験では極めて稀だったといえます。(略)先生に受身をとっていただいた数は私が投げられた数の数倍になると思います。(略)先生は常に大学生の上位者に対し、下位者と稽古する時は相手の好きなように組ませて力を使わないで、その者より一寸上位者になった心構えを持ち、下位者が技をかける時は作り崩しを完全にしてから投げろ。そうすることで互に投げる感じ、かわす感じをつかんで、両者の稽古になるのだと教えられました²⁴。まさに「自分を殺さずして人を殺すことが出来ない」という至言を実践し続けた指導振りが見て取れよう。

そして昭和8(1933)年、46歳で七段へ、12(1937)年には八段へ、と昇段を果たしたのであった。昭和21(1946)年の終戦後には、長年勤めてきた慶応義塾柔道師範の任を武道が禁止されることよって解かれる等の憂き目にも遭うが、昭和23(1948)年には九段に列せられるまでになる。そして、長く日本大学の柔道名誉師範として人材を育てることに没頭するのであった。中野を慕う者は数多く、彼の喜寿の祝賀会などは、かつて中野が指導してきた慶応義塾・日本大学・東京医科大学などが合同で行い、数多くの教え子が集まった。後進の育成に務めてきた中野にとって、忘れ難い最良の日であったであろう。昭和52(1977)年1月、持病の悪化に伴い入院を余儀なくされても、数多くの教え子らが見舞いに訪れた²⁶。ただ、12月22日に89歳で永眠するまで、

講道館創立百二十周年記念

ビデオ 術から道へ

明治十五年(一八八二)、嘉納治五郎師範が講道館柔道を創始されてから百二十周年を迎える。柔道はオリンピック種目となり、人種、言語、政治、宗教などを超越して一九〇を越す國々に広く普及している。柔道はなぜこのように世界に広まったのだろうか。創立百二十年を機会に日本の文化として世界に誇る柔道がどのようにして生れ、どのように広まっていたのだろうか。嘉納師範の技と心を改めてふり返ります。

制作/財団法人 講道館

定価 三、六七五円(税込・送料別)

◎お申込・お問合わせ先

東京講道館 東京支店 日一 一六一三〇

講道館 総務部

〒112-0008 電話 〇三―三三八二―一七二五

一言も「苦しい、痛い」とは洩らさなかつたという。中野の柔道人としての気概であったのであろう。

講道館は中野の功績を讃え、12月21日付をもって彼に講道館柔道十段を贈ったのであった。

最後に、中野の得意技の一つである内股について、中野自身の解説を掲げてこの項を擱筆したい。

(内股の) 崩しであるが、よく内股や跳腰をやる人は腋下の辺を突張られると困るといふのを聞くが、私は突張られても何の苦痛も感じない。かえってそうされると内心しめたと会心の笑を浮べる程である。

いま自然本体に近く左自然体に構えた相手を、やや右自然体に組んだ私が崩そうとする場合、まず第一に自分の右足先を軸にして上体を後に反る気持で左足を廻し引く。この足の捌きと上体の引き加

減で相手は崩れるのである。崩す方向は普通右前隅の方向が多いようであるが、私の場合は左前隅の方向に崩すのである。そうすればどんなに相手が突張っていても自然に相手の臂は死んでしまう。そして更に相手の上体を捻り気味に右に開くようにする。そうすると相手はどうとも出来ない絶体絶命といったところまで崩れてしまうのである。このように説明してもこれだけではなかなか分るものではないが、この辺で御勘弁願いたい。

次は相手の両脚の間に入れた右足についてであるが、私の右内股に当るようになるのである。

第三に挙げることは、軸になっている左足である。相手を充分に崩して作ったその形から飛び込んだ左足について考えると、左足の膝の所は殆ど直角に曲り、左爪先

に力が入っている。この左足が相手の崩れた方向にのび、上体も反り気味に伸びて相手を宙に跳ね上げるということになるのである。²⁷

*引用文献は、現代漢字に改めた。

*表題出典…「中野正三対児玉光太郎」工藤雷介著『近代柔道』第2巻第7号(1980年7月)

《主要参考文献》

「中野正三履歴書」講道館柔道資料館蔵

《その他引用文献・註》

1 現・新潟市秋葉区草水町

2 「柔道半代記」竹下彦一著「柔道新聞」昭和46年5月20日

3 「明治は遠くになりけり」『柔道』第37巻第10号(1966年10月)

4 前掲註3参照

5 後の講道館七段。柔道殿堂の1人

6 「技の冴えと左右の技」中野正三著『柔道』第28巻第3号(1957年3月)

7 後の講道館十段

8 現在の正則学園高等学校の前身

9 前掲註2参照

10 「好きな技思い出の技」中野正三著『柔道』第26巻第2号(1955年2月)

- 11 現在の文京区春日、大黒ビル付近
- 12 中山博道氏が講道館にほど近い本郷真砂町に開いた剣道場「東都四大道場」の1つと言われた。
- 13 前掲註3参照。「講道館の人は困るな、こんなところまで水かぶりに来て」等と言われていたようである。
- 14 これは、嘉納師範から道場内での飲酒を禁じられていたことに関係すると思われる。
- 15 「私の得意技 内股」中野正三著『柔道』第18巻第4号（1947年9月）
- 16 「講道館記事」「講道館柔道教師会々報」第2号（明治42年7月）
- 17 警察・消防活動での慰霊者を祭るための神社。現在は弥生慰霊堂として千代田区北の丸公園内に所在する。
- 18 前掲註15参照
- 19 「中野正三対児玉光太郎」工藤雷介著『近代柔道』第2巻第7号（1980年7月）
- 20 「中野正三と児玉（光）」② 松本鳴弦楼著「柔道新聞」昭和33年3月10日
- 21 「講道館勃興時代への回想」石黒敬七著『柔道』第32巻第6号（1952年6月）
- 22 「下富坂時代を語る」『柔道』第33巻第1号（1962年1月）
- 23 「十段中野正三先生を偲ぶ」伊藤哲三著

『柔道』第49巻第3号（1978年3月）

24 「中野正三十段の憶い出」羽鳥輝久著『柔道』第49巻第3号（1978年3月）

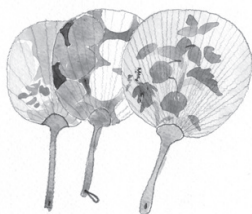
25 中野の先輩であり、尊敬していた佐村嘉一郎十段の言葉

26 「中野正三十段の思い出」今井鉄雄著『柔道』第49巻第2号（1987年2月）

27 「私の得意技 内股」中野正三著『柔道』第18巻第4号（1947年9月）

《写真典拠》

1. 講道館柔道資料館蔵
2. 講道館柔道資料館蔵



一口メモ⑧：十段の名札

以前、日本武道館の行事の折に展示されていた、十段の人たちの名前の書かれた木札が講道館に戻ってきました。山下義韶、永岡秀一、佐村嘉一郎十段のものと、日露戦争で戦死された、軍神と呼ばれた廣瀬武夫六段のものです。これは下富坂道場の正面横に掛けられていたものと推測されます。現在、この木札は講道館資料館に保管されています。

